

TURN JOURNAL

[ターン ジャーナル]

SPRING 2021
ISSUE 07

<https://turn-project.com/>

新型コロナウイルスの影響が日本で顕著に現れるようになってから、一年が経過した。この間、従来の社会生活から距離が生まれたことで、そのありがたみにあらためて気づいたり、むしろ、新しい生活のなかに楽しみや可能性を見出した人もいるだろう。

一方で、これまで価値化もされていなかったあたりまえの慣習、無意識のルーティン、何気ない日常、日々の楽しみが奪われる経験は、大きな負荷を私たちに与えている。経済的困窮に陥り、あるいは職場や家庭でのぎくしゃくを抱え、生活が立ち行かない苦しみのなかに生きる人もいて、多かれ少なかれ、誰もが先々への不安を感じている。

行動や装い、他者(家族、友達、恋人、仕事仲間……)との付き合い方の変更を余儀なくされた一人ひとりの「考え方」と「心」、そして「身体」には、どのような変化が起きているのだろうか。

これまでの常識や価値観に変化が求められるとき、頭では理解できても、行動が伴わない、身体が動かない経験をしたことがある人は多いのではないだろうか。または、倫理的には分かっているけど、肌感覚としては違和感を抱くこともある。

「医療現場の深刻さは理解できるけれど、人と会って話したい、誰かに触れたい」「外出したい人の気持ちも分かるけど、状況を考えると許せない」……。そんな自分のなかの矛盾や葛藤に、誰もが向き合った一年だった。

戸惑いながら切り替えた「あたま」と、肌感覚としてひっかかりを持つ「こころ」、頭では分かっているけどうまく動かない「からだ」。一体に内包されているにもかかわらず、つながっていない状態が生まれているとすると……。

ひよっとすると「あたま」と「こころ」と「からだ」は、いつも一体であるとは限らないかもしれない。相入れない、矛盾する状態のなかで揺れ動きながら次の行動を探し、命をつないでいるとするならば、バラバラなことがむしろ生命線なのではないか、とも思う。

*

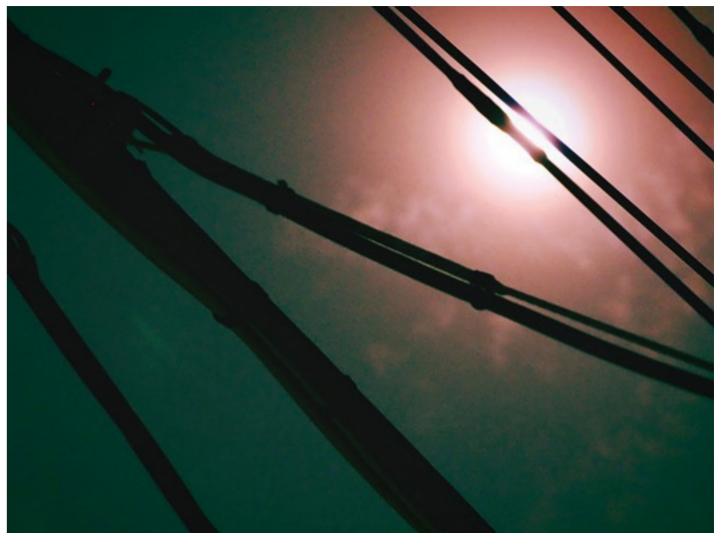
人は容易には変わらない。スマートに、フレキシブルに、てきぱき対応できることを良しとする世情にも辛いものがある。変化への順応性も一つの能力だが、愚鈍と言われても、ぐずぐずしていても、他にも潜在的にそこにあって、湧き上がってくる肉声を確かめてから物事に臨みたい。外出自粛で人になかなか会えないし、会ってもマスクで声も聞こえにくいし、誰かの肩にも触れられないけれども、人それぞれ違う「あたま」「こころ」「からだ」、その関係。それぞれ違うもの同士が、他者とうち会い、つながり、共感や共有を得られるのか。そのためにはどんな視点が大切なのか。あらためて「あたま」「こころ」「からだ」のあり方から、その道筋をたどってみたい。

(永峰美佳)

文化でつながる。未来とつながる。
THE FUTURE IS ART

Tokyo Tokyo

FESTIVAL



TURN JOURNAL 2021

CONTENTS

「弱さ」を育てるために

——切実な創造力への遠回り

青木彬「インディペンデント・キュレーター」—— 3

あたま(こ)から

日比野克彦「URN監修者／アーティスト」—— 6・12

地を這う者、耳を澄ませる者

——「コロナ時代における身体と現代美術

福任 廉「美術評論家」—— 8

身体の複雑性と社会との接続

——《彼女が生きたかった、今日の目》(2021)

八幡亜樹「アーティスト」—— 10

アイムヒアプロジェクト「同じ月を見た日」—— 12

(p.158-161に作品掲載)

目に見えない存在を想像し、ゆっくりと弱さを育てる。これからの世界への取り組み方のヒント。

「弱さ」を育てるために——切実な創造力への遠回り

青木彬「インディペンデント・キュレーター」

右足切断というポジティブな選択

今、みなさんはこの原稿をどんな風景の中で読んでいますか。あまり気を張って読まれると期待を裏切ってしまうかもしれません。できるだけリラックスできる場所で、お茶でも淹れてから読んでみてください。この原稿を書いていく私はいと、自宅の庭先で木々を眺めてミルクティーを飲みながら書き進めています。気の抜けた書き出しをしてしまったかもしれません、この文章を通してみなさんと考えていきたいことは「弱さの育て方」についてです。だからまず体が安心してできる場所や姿勢で読んでもらいたいです。

「弱さの育て方」と要約してしまうと何だかわかった気になってしまうかもしれませんが、まだ自分も言葉にできていない感覚が多くあり、限られた紙幅の中で簡潔に伝えられるのか、ちょっと自信がありません。なぜならこうしてやっと手渡すことができた言葉は、とても個人的な経験に支えられているからです。そこで、ここではコロナ禍より少し前の私自身の「あたま」と、からだ」と、こころ」の変化からお話したいと思います。



3

障害の有無、世代、性、国籍、生まれ育った環境などの背景や習慣の、違いを超えた出会いによる相互作用を、表現として生み出すアートプロジェクト「TURN」。一人ひとりの異なる特性を掘り起こし、あらゆる意識や枠組みを更新していくことを目指しています。「TURN」の取り組みとそれらの意義を、様々な角度から伝えていく定期刊行物「TURN JOURNAL」は、これまで冊子という形で、年に1〜2回発行してきました。2020年度は、日々変化してゆく「TURN」とそれを取り巻く世界について、その時々や状況を伝えるメディアとして、装いも新たに、夏・秋・冬号に引き続き、春号を発行します。

TURNの活動とは？

「TURN」交流プログラム

アーティストと、福祉施設や社会的支援を必要とする人々が時間を重ねて交流し、共働活動するプログラム。また、アーティストによる、社会や日常で意識化されていない課題への気づきを目的としたリサーチも行う。

「TURN」LAND

福祉施設や団体が、アーティストとともに参加型のプログラムを企画する。それぞれの場所に備わった従来の機能に、地域にひらかれた文化施設としての役割が加わり、市民と共に日常的に「TURN」を実践する場をつくる。

「TURN」フェス

「TURN」交流プログラムや「TURN」LANDを実施する、多様なアーティストや交流先の活動が一堂に集まるフェスティバル。作品展示やワークショップ、トークイベント、オリジナルプログラムなど様々なコンテンツを通じて「TURN」を体感できる。

「TURN」ミーティング

「TURN」の可能性を共有し、語り、考え合う場。参加アーティストや交流先などの関係者と共に、各分野で活躍するスペシャリストを招き、様々な視点から「TURN」を考察する。



4

が切断を持ち掛けた会話を主治医の後ろで聞いてくれた医師でした。私が切断に対して前向きに考えていることを知っていたので、15年を経て切断を提案してくれたのです。

切断と聞くとき多くの人は足が無くなると思えないかと思うかもしれませんが、これは人によって異なるかもしれませんが、人工関節よりも義足の方が運動性能が高いのです。人工関節では走ることや自転車に乗ることはできませんでしたが、義足になればどちらもできるようになります。20代ころから毎日のように飲み続けていた痛み止めも必要なくなる。私にとって切断はとてもポジティブな選択だったのです。

あいまいな存在としての幻肢

切断によって運動性能が向上するメリットと同時に、私には楽しみにしていた症状がありました。それが「幻肢痛」です。幻肢痛とは切断したはずの四肢に痛みを感じる症状のことなのですが、この生理学的な現象について様々な哲学者が自身の哲学を語るために言及してきました。私は主にモリス・メルローの著書で幻肢痛と出会ったのですが、切断が決まったと同時に現象学など哲学的な主題としての自身の体の変化へ関心が高まってきました。

社会の動向

ここでは2020年12月中旬から2021年2月中旬にかけての、新型コロナウイルスをめぐる主な出来事を時系列で振り返る。

▼12月半ば、秋以降の「第3波」によって医療体制がひっ迫する状況が続く。東京都では17日、一日の新規感染者数が初の800人を超え、医療体制の警戒レベルが4段階中で最も深刻な「体制がひっ迫している」と思われるに引き上げ。この後、「感染者数」や「重症者数」といった指標も繰り返して「過去最多」を更新していくことになる。25日、同月18日から21日にかけて羽田空港などに到着した男女5人から、英国で流行する変異した新型コロナウイルスへの感染が確認されたと厚労省が発表。26日、日本政府は、全世界からの外国人の新規入国を28日から翌年1月末まで停止すると決定。11の国と地域で実施されているビジネス関係者の往来については認められたまま。30日、2度目の緊急事態宣言について、西村康稔経済再生相がSNSに投稿した動画内で述べるなど、発令が現実味を帯びる。31日、東京都では一日の新規感染者数が初の1000人を超え、急激な拡大に歯止めからず。

▼2021年正月、「帰省自粛」「分散参拜」の呼びかけで、各地の空港や駅、神社では入出が減少。例年とは異なる年明けの光景に。2日と3日に開催された恒例の箱根駅伝では、沿道の観客が前年比約85%減（関東学生陸上競技連盟発表）。4日、政府は新型コロナウイルスのワクチン接種の開始時期について、2月下旬を目指すとの目標を示す。優先接種対象は医療従事者や高齢者、高齢者施設での従事者。7日、東京、埼玉、千葉、神奈川の1都3県を対象に緊急事態宣言が発令。期間は2月7日まで。これを受け、都も「緊急事態措置」を決定。不要不急の外出自粛や、飲食店の午後8時までの短縮営業などを要請。8日、国内の一日の感染者数が7844人（厚生労働省調べ）で過去最多を更新。この頃より、検査で陽性となったあとも入院先や療養先が決まらないケースや、自宅療養中に症状が悪化して死亡するケースの増加が目目を集める。11日、各地の自治体で成人式が延期や中止に。13日、緊急事態宣言の対象に大阪、京都、兵庫、愛知、岐阜、福岡、栃木の7府県が追加。14日、11の国と地域を対象に認められていたビジネス関係者の往来が停止。これにより、特設の事情を除いて外国人の日本への入国が全面停止された。また、新型コロナウイルスの発生源を調査するWHO「保健機関」の調査チームが中国湖北省武漢に到着。15日、国内で新型コロナウイルスの感染者が初めて確認されたから一年が経過。16日、「大学入試センター試験」に代わり新たに導入された「大学入学共通テスト」が実施。感染の影響を考慮し、30日からの「第2日程」と「第3日程」が設けられた。20日、首都圏の鉄道で終電の繰り上げが開始。22日、政府は新型コロナウイルス対策の特別措置法や感染症法などの改正案を閣議決定。27日、厚労省と神奈川県川崎市がワクチン接種の共同訓練を実施。国と自治体の共同訓練は初。また、世界全体で新型コロナウイルスに感染した人が1億人を超えた（米ジョンズ・ホプキンス大学調べ）。29日、沖縄県は感染が急拡大する宮古島市へ自衛隊の災害派遣を要請。30日、埼玉県で国内初の変異ウイルスによるクラスターが発生したと見られると厚労省が発表。

▼2月2日、栃木を除く10の都府県で緊急事態宣言の延長が決定。期間は3月7日まで。3日、新型コロナウイルスによる国内の死者が6千人を超える。5日、厚労省は新型コロナウイルスの感染歴を調べる抗体検査の結果、東京都では0.91%から抗体が検出されたと発表。政府は中小企業の労働者に支給していた休業支援金を、大企業の特例労働者にも拡大すると表明。12日、新型コロナウイルスのワクチンを積んだ貨物機の「第1便」が日本に到着。17日、医療従事者を対象に国内初のワクチン接種が開始された。

(杉原環樹)

そして2019年11月に右足を切断したので。手術自体は数時間で終わり、気が付いた時にはベッドに戻される瞬間でした。まだ麻酔で朦朧とする意識の中で感じたのは、右足の燃えるような熱感でした。うっ血しているような、正座をして痺れてしまったような、右足には確かな存在感があったのです。「もしかして手術は失敗して、まだ右足が付いているのかもしれない」。そんな不安が頭を過りながら視線を天井から足元へ移すと、そこには膝の辺りでぐるぐる巻きになった包帯が見えるだけで、その先に足はありませんでした。確かに感じる右足の存在感と右足が無いという客観的な事実。おぼろげな意識の中でもこの圧倒的なギャップだけははっきりと覚えていました。初めは幻肢痛というよりも手術による肉体的なショックが大きく、漠然とした鈍痛のようなものでした。しかし、術後4日くらい経つと、その痛みは右足が存在していたところに感じていることがはつきりしてきます。切断という体の変化や痛みよりも、幻肢痛の体験への好奇心が抑えられず、数名のアーティストの友人にメッセージを送りつけました。彼らとのやりとりを機に私は自身の体の変化や気づきをSNS上で「無いものの存在」と題して綴ることにしました。

ウイルスに対峙する姿勢

こうして私の「からだ」は2019年の年末に大きく変化しました。そして更に、2020年1月には義足のリハビリを終えて仕事にも復帰したのです。それと同じころ、世界中で感染拡大していた新型コロナウイルスの感染者が日本でも出始め、遂には緊急事態宣言が発令される事態となりました。この驚異的な感染力を持つた新型のウイルスに対して、「戦争」という比喩で国民を鼓舞するリーダーもいたことが印象に残っています。ウイルスを「撲滅」して人類が「勝利」するというストーリーは、どこかドラマチックな響きもありました。確かにこの深刻な事態を取捨するために私たちは感染の拡大を抑制し、感染した人々が居たならば救わなければいけない。そのこと自体は間違いなく大切なのですが、私が気になったのはウイルスに対峙する姿勢です。前述した通り、私は「感染症」によって右足を切断することになりました。様々なメディアで「感染」の2文字を見る度に、果たしてウイルスは戦



5

うべき相手なのかを考えてしまったのです。感染とは、体に病原体が入り込み、病気になることと辞書には書いてあります。私のように人工関節を入れていると、何かの拍子に病原体が人工関節に付着してしまい感染症になることがあります。感染症が見つくと人工関節を取り出して消毒してから戻すという手術をされる方もいるのですが、私は「石足を失うという死闘の末、感染に勝利した」のでしょうか。



6

少し寄り道してお話すると、私は個々人の「生」が関わる事象を勝ち負けのベクトルで考えることが好きではありません。12歳の当時、入院した病院には私以外にも数名の骨肉腫の同世代の子供が入院していました。彼/彼女は入院中はよく部屋に集まって遊んでいた特別な友人ですが、病状は人それぞれです。現在までの間に、何人もの友人が亡くなっていくのを見てきました。時々漫画や映画の物語の中で「亡くなった○○のために頑張る」という話を見かけます。果たして誰かの死を生きる糧にすることはできるのだろうか。亡くなった友人たちには年齢に関係なくそれぞれの人生があり、それをむやみに引き受けることはできないのではないかと、多くの人が感動するような物語でも、自分が見てきた現実とのギャップが大きく、多感な10代ではどうしても心が動かないことがありました。新型コロナウィル

るものだからです。そして私がここまで個人的な出来事や心情を書き綴ってきた訳は、現在多くの人が直面しているコロナ禍でも同じように、個々人の小さくてフレンジイな感覚が大切になると思うからです。

当事者性に潜むフレンジイな感覚

目には見えないウイルスの存在によって、これまでは居心地の良かった「当たり前」を捉え直さなくてはいけなくなった時、例えば家の中で過ごしている間に否が応でも私的なスケール感を意識することになったと思います。仕事とプライベートの分け方だったり、家族やパートナーとの生活習慣のちよつとした違いの表出まで、そのスケール感はあるにしか測れない物差しとなり、それによって社会や他者との距離を測ることであなた自身の固有性や当事者性が見えてきたかもしれません。その当事者性には、あなたにしかわからない、フレンジイな感覚が潜んでいます。

例えば近年、人それぞれ多様なアイデンティティがあることを理解し、これまでの社会が生んでいた抑圧や不均等を修正しようとする動きも活発になっています。そのために今多くの人たちが声を上げていますが、一方でそうした人々の声を批判的に捉える層も存在します。社会の不均等



9

スに対する比喩にも似たような違和感があったのです。右足切断に至る感染とは私にとって共存の中のグラデーシヨンのようなものでした。

目には見えない世界

戦争などの比喩はリーターシップを發揮するために重要なパフォーマンスかもしれない。目には見えない感染と向き合うには、わかりやすい比喩が必要だったのでしよう。考えてみると私たちはあらゆるものを可視化することにこだわっていたのかもしれない。目に見えれば安心できる、そしてコントロールできる、そんな風に考えていたのかもしれない。目に見えれば安心できる、痛みを抑えるための薬は、神経を落ち着かせるためのもので、「幻肢」自体に効くわけではありません。入院中、薬剤師の方を幻肢痛のことで質問攻めにしてしまうと、「薬は見えないところにしか効きませんから……」と言われてしまうことがあります。幻肢はみんなに見えないし、私にだって見えてはいません。実際に右足も無いわけですが、でも見えないから無いということにせず、見えないからこそ、そこには想像力が働くはずなんです。

突然ですが私は最近、家庭菜園を始めて驚いたことがあります。それは、同じ種でも植える場所の土によって成長具合が全く異なるのです。よく「土壌」という言葉はアートにまつわる比喩でも出会うことがありますね。私もよく「文化的な土壌」なんて書くことがありました。でも、その大切さ、複雑さは本当には理解できていませんでした。自然界では1センチの土が積もるのに100〜500年かかるそうです。それは土の中に数十億という細菌類の働きによってつくられていきます。落ち葉や生き物の死骸を分解することによってそれが植物の栄養へと変わる。そんなことを知らずに私たちは野菜を口に運ぶわけなんです。

この世界には目には見えないけれど、私たちの生を取り巻く多様な物事が存在しています。そんなの当たり前だと思うかもしれませんが、その「当たり前」をみなさんはどんな風に体験していたのでしょうか。誰かが言っていたから、今までそうやってきたから、それっぽいから何となく、そんな感覚で当たり前がそれ以上がってはいなかったでしょうか。新型コロナウィルスという目に見えない要因によって、一人ひとりの生活、人間関係、仕事、娯楽、様々なものが制限されたり、変

に対してその是非を問う姿は、「見ると」「強い」印象を与えるのかもしれない。また、私は身体障がい者手帳が発行されており、世間的には障がい者、つまり社会的弱者と呼ばれ得る存在です。しかし、12歳で発病して以来、初対面の人に「足どうしたの?」と聞かれて病気になることを説明すると「ごめんね」という返答が一定数返ってきました。聞いてはいけないことを聞いてしまったと思いを遣つてくれたのだと思います。私は「弱さ」を開示しただけに、相手に気まずい思いをさせてしまうという圧力を自分に与えてしまう。社会的弱者と呼ばれる社会から見えない、アンタッチャブルな存在となつていくことで、いつの間にか「強さ」の引き金を引いてしまう。その中で自分の「弱さ」をひらこうとすると、またしても自分がアンタッチャブルな存在として再生産され、より一層孤立してしまうという矛盾や悪循環を感じました。

「弱さ」を育てる

それぞれの私的なスケールに潜むフレンジイな感覚にも似たところがあります。そこには弱さも強さも同居していて、自分や他者を強く引き付けることもあれば、猛烈に反発させてしまうこともある。でも自分の中のわからなさも、あえてわからないまま内在させておくと、「弱さ」が「弱さ」のままではいられる隙間が生まれるのです。こうやって「弱さ」をうまく育てるには、何でも可視化してコントロールするのではなく、曖昧さを戦略的に使って不可視の存在を自分の中に許容する技術が必要です。私でいえばそれが目には見えないけれど感じてしまう幻肢という存在でした。

そんな未知なる存在を初めから「アートです」と言って書き進めることもできたのかもしれない。でも、そうやってアートというひとつの言葉を手から信じ切ってしまうと辿り着けないものが「切実な創造力」だったので。繰り返になりますが、個人的な経験を經由してきた理由はここにあります。この小さな経験から遠回りすることが「弱さ」を育てる時の大切な時間だからです。例えば良い作品や企画は、圧倒的なアイデアとパシッとしたディレクターやテキパキした運営チームがあればつくられるかもしれないけれど、それが実感のない当たり前寄りかかってい

化を強いられたい途端、これまでの価値感が一変しました。人に会えないというストレスや一人で居ることの不安。今まで自分を満たしてくれていた五感の刺激が半減しました。しかし、感染症で右足を切断したり、野菜づくりで土に目を向けていると、今まで私は目に見えて手で触れられることを価値だと思いついてきたのではないかと感じたのです。自分の「あたま」では考えず、「からだ」では感じずにわかつた気になつていった「当たり前」にあぐらをかいていただけなのではないかと。

創造力の合理性

考えてみれば、自分自身の「からだ」だって見えない、わからないことばかりです。だから幻肢痛について考えることは楽しいのですが、面白いのは自分の体だけではありません。人間って何で曖昧な存在なんだろうと思つた出来事があります。それは脳腫瘍で亡くなった父親の言動です。父親は演劇の舞台監督をしていたのですが、彼が腫瘍の摘出手術を受けた後、自分の名前を聞かれると一緒に仕事をしてた演出家の名前を答えたり、病棟のロビーを舞台のように上手下手に分けていたのです。病気が見つかるまでは本当に仕事ばかりしていた人だったので、術後もずっと舞台の上で生きていたのかもしれない。学生時代



7

るのなら、「弱さ」は他者を遠ざけ自分を孤立させる「強さ」に、「強さ」は弱さを感じ取れない「弱さ」に反転してしまうかもしれません。

コロナ禍では社会的な繋がりが希薄になるだけでなく、「強さ」に「強さ」を感じ取れない「弱さ」に反転してしまうかもしれません。コロナ禍では社会的な繋がりが希薄になるだけでなく、一人ひとりの「あたま」や「からだ」、そして、ところが様々な矛盾を抱えてしまいがちです。だから今、戸惑いや違和感にすぐに答えを出す必要はないと思います。割り切れない世界をふわふわしながらも大きな言葉に流されないために、見えない世界を想像してみてください。そうやってゆっくり弱さを育てることで、「あたま」と「からだ」を繋ぐための土壌となる。「こう」ができていくと思います。丁寧に養われた土壌をつくるには少し時間はかかるかもしれないけれど、きつとあなたにとって切実な創造力を生み出してくれると思います。

新型コロナウィルスだけではなく、これまでの社会構造が生み出した分断を修復するためには、そんな切実な創造力がカギとなるでしょう。ひとつひとつの分断の割れ目に入ることでできる小さな語りがあり、そして誰かの当たり前前に流されない一人ひとりの強い「弱さ」が必要になるはずなんです。

はそんな父親の姿を見ながら現象学なんかを語っていたので、人間の輪郭は案外脆いのだと考えるようになりまし。しかし、自分の名前を答えられなくなったり、病棟を舞台だと思いついてしまったからなのでしょう。確かにそんな父親を自宅や病院で介護するのは大変な面もありましたが、彼自身も自分が変わっていくことに戸惑いを感じていた気もします。だからそんな自分と現実との間にできてしまった溝を埋めるために、「舞台の上で生きていく」という初期設定をしたのかもしれない。傍から見れば当たり前前の会話もできない人だったかもしれませんが、彼は脆くなつてしまった自分自身の輪郭を保つために創造力を駆動させたのです。それは彼自身にとって合理的な振舞いではないかと。そのほうが生きやすかつたのではないのでしょうか。

幻肢痛を感じた時に、これはよりよく生きるために使える「技術」だと直感したのは、そんな「創造力の合理性」みたいなものが駆動する予感があったからなんです。それは立ち上がる前に無意識に「よつこらしよ」と発してしまつたような必然性との出会い、しかも誰かから教わるのではなく、自分の体や心が心地良くなるために自分自身を演出してくれるような瞬間です。そしてこの創造力は、誰かが決めた当たり前前の価値観で測れるものではありません。それが必要とするごく限られた人にしか必要とされない創造力です。でも、そこに宿る切実さはとてつもない強度を持っている気がします。

私はインディペンデント・キュレーターという肩書で、展覧会やアートプロジェクトの企画を行っています。そこで出会うアートとは美学や歴史、哲学、社会学、心理的な作用など多様な視点から考察され、それらを複合的に捉えながら批評が成り立っています。そこで問われる価値とは目の前の作品だけではなく、歴史の中で過去の作品との繋がりが差異によって紡がれていくものです。こうして作品を通じて時代を超えていくダイナミズムをアート自体が持っていることは、様々な文化の中でも重要なことだと思いません。しかし一方で、大きな歴史を前に語れなくなつてしまつた小さな創造力の価値もあると思うのです。ある個人に起きた「創造力の合理性」の価値などは、ダイナミックな歴史の前ではどうしても語りにくいのです。なぜなら当事者が必要とした「切実な創造力」とは、私的で小さなスケール感の中にあ

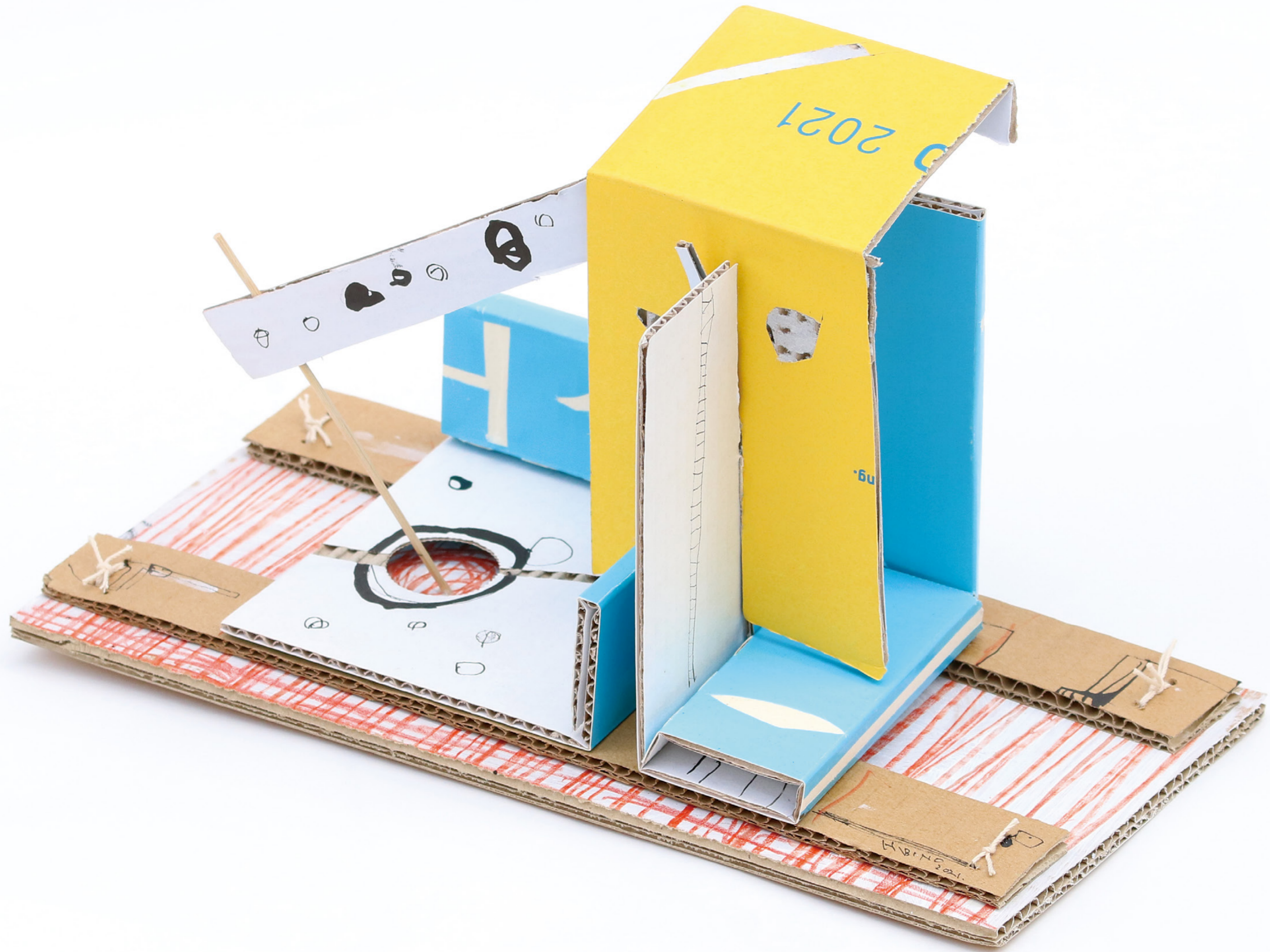
「弱さ」をうまく育てるには、何でも可視化してコントロールするのではなく、曖昧さを戦略的に使って不可視の存在を許容する技術が必要です。



10



8



コロナ禍において私たちは、身体と感覚の分裂を味わっている。あるアーティストの作品を通して見る、現代社会への処方箋。

地を這う者、耳を澄ませる者

——コロナ時代における身体と現代美術

福住 廉 [美術評論家]

声をメディアムとした
コミュニケーション

新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、ほとんどの大学が講義や演習をリモートで行うようになって久しい。例外なく、わたしの講義もすべてリモートである。しかも、事前に収録した講義を指定された時間内に視聴してもらうオンデマンド方式だから、学生との接点は皆無に近い。事実、わたしは今年度の受講生に会ったことがないし、顔も見たことがない。どんな学生がどんな表情で講義を聴いているのか。ふつう、教員は彼らの反応を直接的に確認しながら、それらを糧にしながら、講義を進ませるものである。それが叶わない今、自分の講義が図らずも機械的になっているのではないかと、学生の教育にとれば有効なのかもしれない。多くの教員が自問自答を繰り返しているにちがいない。

ただ、学生との距離が開いた一方、キャンパスとの距離は消失した。通勤のための時間と距離がなくなったのだから、論理的に考えれば、その余剰をもってして教育サービスを拡充することもできなくはない。じつさい、わたしの実感で言えば、講義を在宅で収録することにある程度慣れれば、これまで費やしてきたキャンパスに往復するための長い時間も、時間割という制度さえも、とてつもない無駄に思えてくる。けれどもその一方で、教員であれ学生であれ、対面のコミュニケーションで得ていたのは、そのような損得勘定で計上できる代物ではなかったはずだ。それらを正確に何とどうすべきなのか、今のところわからないが、少なくとも指摘できるのは、新型コロナウイルスの世界的な蔓延によって、わたしたちはこれまで自明視してきた大学教育の価値がいない。

値を根本的に再検証するよう促されているという点である。外形的には通信教育と大差なくなっってしまった大学教育には、いったいどんな価値があるのだろうか。

興味深いのは、そのような根源的な自問自答が、旧メディアを同伴しているように見えるという点である。リモート講義はインターネットの技術に依存しているのだから、その点ではYouTubeのコンテンツと著しく近接しているのだが、その一方で、当事者の感覚からすると旧来のラジオによく似ている。ラジオとは、言うまでもなく音声メディアムとしたコミュニケーションモードである。わたしは遠いリスナーに語りかけるDJのように学生に声を届け、学生も画面共有されたスライドを眼で追いつながら、その声に静かに耳を傾ける。基本的にDJとリスナーが対面することはないように、わたしも自分自身を撮影することはないから、わたしと学生とのあいだに視覚的な個人情報交換は一切ない。つまり、身体は欠落しているが、声だけが突出しているのだ。

講義だけではない。演習はさすがにオンタイムで実施しているが、それにしてもオンライン上に顔を出さない学生が少なくないから、そのうちわたしも面倒になって自分のカメラをオフにしてしまった。自分の顔だけを見ながら見えない他者に話しかけることは拷問に等しい。すなわち、ここでも主要なメディアムは声なのだ。より厳密に言えば、この場合のコミュニケーションの様態は、ラジオというよりむしろ電話に近い。相手の顔が見えないがゆえに、耳に届く声の質だけを手がかりにしなが、あれこれ相手の心情を感じているからだ。

世界の隅々まで視覚化するインターネットと

わしいパフォーマンスだった。

遠藤 一郎 (1979年静岡県生まれ) はかねてから全国各地をほふく前進で踏破してきたが、《ほふく前進御百度参り》は水川神社の参道をほふく前進で100回お参りするというもの。出発地点である一の鳥居から到達地点である三の鳥居まで約2キロ。つまり、遠藤は100日かけて約200キロをほふく前進で踏破したことになる。時まさに一回目の緊急事態宣言が発令された中、多くのアーティストがやむを得ずオンラインに活路を求めたのとは対照的に、遠藤はコロナ以前と同じようにあくまで現実的空間の中で愚直な身体運動を繰り返す行為に賭けたのである。ほふく前進とは、身体を伏せた状態で両腕と両膝を使って前進すること。二足歩行に比べると、当然スピードは遅い。その遅さと伏せた姿勢が相俟って、参道を往來する多くの人びとの視線を集めた。好奇の視線を露骨に投げってくる人はむしろ少数派で、ほとんどの人は無関心を装いながらも視界の端で注意を向けているような素振りだった。散歩中のペットの犬だけは、ほぼ同じ視線にいる遠藤にひどく興奮していた。新種の動物とても認識したのである。

たしかに遠藤のほふく前進は、それが四足歩行の動物を連想させる点で動物のだったが、より厳密に言えば、人間にも動物にも共通する原始的な身体を体現していたように思ふ。なぜなら、それは身体そのものの本質を凝縮して表現していたからだ。肉体的という物質性、それを規則的に反復させる運動性、そして言葉に依存しない非言語性。人間にも動物にも通底する、そのような身体の本質的な構成要素を、きわめて純粹なかたちで体現していたのが遠藤 一郎にほかならない。

人間の本来の身体姿

重要なのは、そのような原始的な身体イメージが、新型コロナウイルスに翻弄されるわたしたちの身体像のありようを鮮やかに逆照していたという事実である。移動と密集を禁ずるコロナ時代において、わたしたちの身体の運動性は大きく制限されている。非言語性に至っては、強いられた孤立を打ち破るかのよう、今や誰もが羨しい。そのような言語のやりとりですらインターネットに依存していることを思えば、もしかしたら身体物質性すら関係性や言語性の中に溶け込ん

いう情報技術が、わたしたちの暮らしを飛躍的に発展させたことは疑いない。だが、そこで交わされるコミュニケーションの形式が依然として旧来の音声メディアから抜け出すことができないのは、皮肉といえば皮肉なのかもしれないし、ある種の退行といえば退行なのかもしれないが、いずれにせよコロナ時代に特有の今日的な症例を示しているように思われる。

「身体と感覚の分裂」という「症例」

現代社会を蝕むその症例を、さしあたり「身体と感覚の分裂」と呼ぶとしよう。目下のパンデミックは社会や共同体を分断しつつあるが、個人の感覚や身体を断片化しているからだ。むろん、音声や文字に特化したソーシャルメディアはコロナ以前から隆盛していたから、「身体と感覚の分裂」がコロナ時代に特有の症例とは言えないかもしれない。だが、それをあえて今日的な症例と言いたいのは、そのような「身体と感覚の分裂」が、分裂を分裂として意識しない程度まで、全面的に自然化しつつあるからだ。

たとえば、ソーシャルメディアにおける人格は分裂していることが多いが、大半のユーザーはそうした断片化された情報を全体的な人格として認識している場合が少なくない。大学の講義にしても、今や遠隔授業は常識となり、大教室での講義は非常識となってしまった。教員が声だけの存在になってしまったとしても、それに本格的に異議申し立てする学生は少ないし、教員も通勤の労力がない快適さに溺れがちである。つまり、分裂とはことごとさように常態化してしまった



11



12

でいるかもしれない。だが、あるべき身体とは、物質性と運動性、そして非言語性で構成された全体であることは言うまでもない。遠藤のほふく前進は、一見すると非日常的で突飛なパフォーマンスのようだが、じつところわたしたち自身の身体の内なる偏りを残酷なまでに正確に照らし出していたのである。

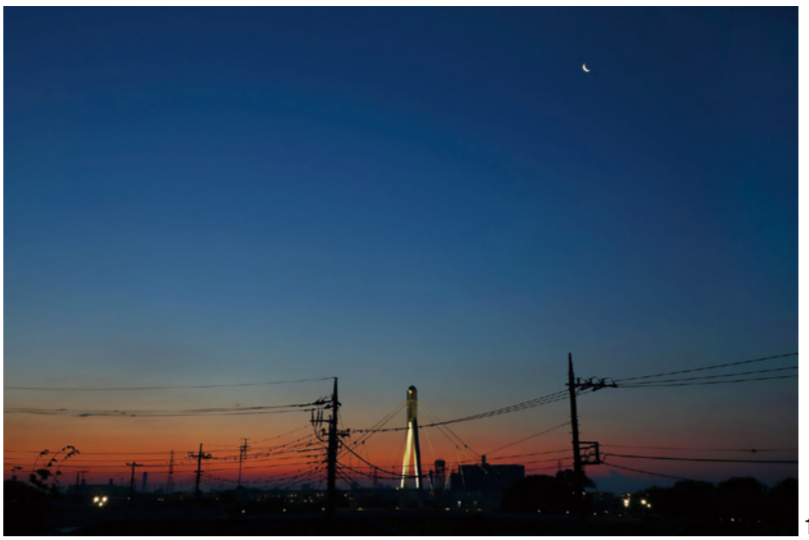
コロナ時代におけるわたしたちの身体を以上のように診断するとすれば、どのような処方箋が考えられるだろうか。ひとりのアーティストの表現活動にそこまで求めるのは筋違いかもしれない。だが、処方箋とは言わないまでも、最低限の指針を見出すことはできる。遠藤 一郎が体現していた原始的な身体イメージは、物質性と運動性、非言語性に忠実だったが、それらに通底するもっとも根源的な要素は、孤独である。人間の身体とは、本来的に孤独だった。事実、遠藤は《ほふく前進御百度参り》をたつたひとりて開始した。後に撮影のためのスタッフや、わたしのような鑑賞者が随伴するようになったが、あくまでもほじまりは孤独な単独行為だったのである。

コロナの身体から原始的な身体を取り戻すには、もしかしたら、徹頭徹尾、孤独を突き詰めることが必要なのではないか。たしかにコロナ時代を切り抜けるためには関係性や言語性を拡充することが有効なのだろう。しかしより本質的に考えるならば、むしろ関係性や言語性を潔く断ち切り、ひたすら孤独を噛みしめ、その静寂の中で身体像のありようを根本から再考すべきではないか。「身体と感覚の分裂」を縫合する全体は、孤絶した主体から組み立てられるのかもしれない。

原始的な身体イメージ、それらに通底するもっとも根源的な要素は、孤独である。人間の身体とは、本来的に孤独だった。



14



13

わけた。けれども本来重要なのは、教員であれ学生であれ、大教室での講義への欲望を見失わないことではなかったか。分裂に甘んじることなく、全体への欲望を諦めないことではなかったか。三密を回避する必要性を理解しながら実行することと、三密という快楽への欲望を維持することとは本来的に別問題である。だが「withコロナ」や「新しい生活様式」といったフレーズは、わたしたちの内なる欲望そのものを縮減させようとする。言ってみれば、異常をいつのまにか日常に溶け込ませる悪質な政治が進行しているのだ。だからこそ、この「新たな日常」を「症例」として意味づける視座が必要である。コロナ時代の現代美術は、このパースペクティブから果たしてどのように見えるのだろうか。

コロナ禍でのパフォーマンス作品

「身体と感覚の分裂」に抗いつつ、それらの全体を回復させようとする。コロナ時代の批評的焦点がこの点にあるとするならば、現在もつとも注目すべきアーティストは遠藤 一郎である。2020年の4月から5月にかけて、埼玉県さいたま市大宮区において実行された《ほふく前進御百度参り》は、まさしくコロナ時代にふさ

ふくすみ・れん 九州大学大学院比較社会文化学府博士後期課程単位取得退学。2003年、美術出版社主催第12回芸術評論で佳作受賞。各誌で展覧を連載。美術雑誌、ウェブマガジン、新聞、展覧会図録、作品集などにも寄稿している。展覧会のキュレーションも手がける。著書に『今日の限界美術』(Bank ART)2008年、等。東京藝術大学大学院、女子美術大学、多摩美術大学、横浜国立大学、和光大学非常勤講師。

被害者家族と加害者家族。相容れない二者の存在に、「中立な眼差し」を持ち続けることの難しさ。

身体の複雑性と社会との接続

——《彼女が生きたかった、今日の日に》(2021)

八幡亜樹「アーティスト」

今回のテーマについて

私は今回、企画側から次のような内容を執筆のテーマとしていただきました。「コロナ禍で、人々は大きな小なり「あた・ころ・からだ」の分裂を経験した。個の中に内在する様々な側面とその関係性を見直し、より良い「生」と他者との接続を目指すにはどんな方法があるか。」

このテーマを聞いたとき、唯唯に2021年に発表することとなった自身のインスタレーション作品《彼女が生きたかった、今日の日に》がよぎりました。この作品は、犯罪の加害者家族に焦点を当てた作品です。この作品の周辺について語ることは、加害者家族と被害者家族の身体について語ることであり、同時に、作者である私が経験した身体の複雑性、そしてそれらを統合し、社会に接続する術としての「芸術」について語ることになるでしょう。

大山寛人の身体

2018年頃から、私は少しずつ犯罪の加害者家族の取材を始めました。きっかけは、自身の友人がある事件の容疑者として逮捕されたことでした。この経験を引き付け、加害者家族の尊厳が脅かされる社会に対して違和感を感じるようになり、同時に、この出来事を通してまさしく私自身も「身体の複雑性」を痛感し、これらの感覚を「社会に接続する(他者と共有する)」必要性を感じました。

作品には、大山寛人さんという、「僕の父は母を殺した」朝日新聞出版、2013年「を」を上梓した方に出演と取材協力をしていただきました。大山さんは実父(のちに死刑判決を受けること

なる)が実母を殺害したという生い立ちがあり、大山さんの体には被害者家族と加害者家族の両方の身体が内在していました。大山さんは死刑囚となった唯一の内親である実父の死刑を望んでおらず、「被害者家族の望まない死刑もある」という一例としてパブリックな場で自身の境遇を語り続けてきました。

しかし私が取材を通して強く感じたのは、大山さんが自分の傷をさらけ出し、社会に役立てようとする姿勢に抗して、社会側から加わる制止や圧力についてです。具体的には、就職先から講演活動を禁止されたり、コロナ禍で余儀なくされた転職では、指しに刺んだ母の戒名の刺青を消去した刺青以上に、消えかけの治療痕の方がとても痛々しく見えました。また、大山さんはまだ33歳にもかかわらず、結婚を諦めたと言います。自分の境遇ではパートナーを幸せにできないからと。こういった状況を作っているのは、決して大山さんの個人的な考え方や選択だけではなく、社会のあり方がそうさせているところが大きいと感じました。

友人の逮捕

制作の動機となった、友人の事件が報道された日のことを少しお話しします。報道の翌日、大学に行くも、周囲の状況は一変していました。どこへ行っても、友人を批判する辛辣な言葉が聞こえてくるのです。友人と比較的近い距離で活動を行っていた人たちがさえも、友人のことを「悪」の対象として捉え、己は「善」として悪を制裁する世界へと1日にして豹変していました。友人にかかった容疑や事件の詳細は、ここでの話の本質感を感じました。

海外と日本の加害者支援の違い

「World Open Heart」という、犯罪の加害者家族を支援する団体があります。私はその団体の代表の阿部恭子さんの著書を拝読し、支援の会の一般向けの講演にも参加させていただきました。そこで印象的だった話をいくつかここで共有したいと思います。

まず一つ目は、海外では加害者家族は社会から虐げられるどころか、むしろ応援されているという事です。アメリカで起きた銃乱射事件では、犯人となった少年の母親は実名メディアに顔を出し、その結果として世間から暖かい声の雨が降り注いでいます。日本では、加害者の罪は親の責任でもあり、家族にも連帯責任があると考えられる傾向が強いと感じます。私は海外の対応に賛同します。なぜなら、子供と親は別人格で、一人の人間として人生を歩み始めたら、そこでなされた選択はその人の責任問題になっていくと考えるからです。連帯責任と感じるかどうかは少なくとも家族が自分たちで決めることであって、周囲が加害者家族を連帯責任という名の刃物で追い詰めて生きている場所を奪い、幸福な未来を奪い、尊厳を脅かすことは果たして適正なことなのでしょうか。私は加害者家族の脆弱な尊厳というものについて非常に問題意識を感じています。追い詰められた加害者家族の自殺率が高いことも問題です。加害者家族は誰にも弱音を吐けず、奪われた命に対する罪悪感を背負いながら、幸せになりたいと望むことも笑うことも躊躇しながら生きています。加害者の家族が自分の命を絶つほどに追い詰められる社会のあり方にはかなり懐疑的です。むしろ社会は、脆弱化した家族の尊厳を守る必要があるのではないかと思っています。やみません。こういった繊細な問題は、当事者以外の人間は口をつぐむか、被害者側に立たなければならぬような空気が感があり、それがさらに加害者家族を追い詰めているようにも思います。

ではないので詳しく触れませんが、何よりも周囲の変化が大きき違和感として感じられました。真実が何も語られていない、そんな状態の中では、我々にはまだ「中立である」「沈黙する」という選択も残されていました。しかしそれができなくなっていた理由は何だったのでしょうか。一つには、メディアによる報道の仕方があるかもしれません。事件の凄惨さや、加害者の悪にフォーカスした事件のインパクトは、加害者家族や加害者周辺の人、そして、もしかすると被害者家族の存在すらも覆い隠し、不可視としまっているかもしれません。それにより、事件の背後に生きている色々な立場の人のことを想像するのが困難になっていると考えられます。二つ目は、現代の情報化社会が、Twitterなど「発言の気軽さ」の文化の中に成り立つようになり、思慮深く口を慎んで静観することの尊さが薄れてしまった可能性もあるかもしれません。

加えてこの「中立」問題の難しさは、「中立」と思っていた私自身すらも、被害者家族から「中立ではない」という指摘を受けることとなった現実の中に如実に表れています。

加害者家族の尊厳の話をするときに難題として浮かび上がるのは、被害者と被害者家族の存在です。加害者家族を擁護することは、被害者とその家族をないがしろにしているという考えも社会にはあるからです。事実、私の身体も作品制作の過程でその両方の考えの間で引き裂かれることになりました。

当初の作品の構想は、被害者家族と加害者家族、そして被害者家族であり同時に加害者家族である人(家族内事件)の身体感覚を同一の空間に展示し、それぞれの立場の詩を曲に乗せて一つの空間に混在させ、次第に空間が一つの歌曲を奏でるようになり、そうすることで、現実世界では被害者と加害者関係の完全分離により盲点となっていた、事件の周辺(「生」と、事件と同時代に生きている全ての私たちの「生の同時性」を感じ取れる)と考えたからです。しかし、私はその作品構想がいかに浅はかだったかと、被害者家族とのやり取りの中で気づかされます。被害者家族の方のいくつかのメールのやり取りを抜粋します。

人間の身体は、風土や社会システムで全くあり方を変えるということを私はミクロネシアにあるビンラップ島の全色盲者の取材を通して感じました。ビンラップ島では人口170人程度のうち、12人が全色盲で、世界的に見ればマイノリティな全色盲者が、この島では比較的马ジリティとして存在していました。

非常に興味深かったのは、ビンラップ島で自給自足を営む全色盲者と、アメリカのような大きな国家で暮らす全色盲者では、障害者としての自意識や、実際の生活に大きな違いがあったということです。都市では、車の往来も多く、色盲であると同時に羞明や弱視を合併する全色盲者にとっては、道を歩くことすらも簡単ではありません。よって、白杖をつき、視覚障害者としてのサポートを受けて暮らすこととなります。就労も、羞明のために日差しの下での作業が難しく、制限がかかります。

一方でビンラップ島は車が走っていないので、交通の点で彼らが危険にさらされることはありません。そして、ビンラップ島で暮らす全色盲者は皆、生まれたときから暮らしている島と自身の身体がほぼ一体化しているので、多少視覚的に問題があっても、土地の大部分を体が覚えており、滅多に危険な目には遭わないのです。何メートルもの高さのコナツツの木に登ることもできていました。風土や社会システムの違いによって、同じハンディキャップを負っていても、表出する身体はこんなにも変わるかと驚かされました。ビンラップ島で生きている全色盲者の方が、自他共に「障害者」という意識は少ないかもしれません。しかし、アメリカで障害者として白杖を持つことにより、障害への理解と支援を得やすくなるという点では、アメリカのような先進社会が、必ずしも障害者の身体的自由や可能性を奪っていないかもしれません。

このような風土や社会システムが身体に与える影響は、おそらく全ての人に起こっていて、何かの条件が違えば、おそらく全く違う身体性を示す可能性が自分にもあることに気づかされます。日本にはまだ、加害者家族の支援団体が2、3団体しかありません。加害者家族に暖かな声が届く国に生きているか、そうではない国に生きているか、加害者家族の身体は、人生は、全く別の運命を背負うことになるのかもしれない。

「八幡さんが表現したいと思っている世界は、私の中にはありえないと考えています。私は加害者側に関わりを持つことを好みません。正直、こうして八幡さんがそうまでして加害者側の人間の何を表現してあげたいと思ってるのかにも理解が苦しみます。詩が最後に混ざり合い被るとか、はつきり言って「どうかして」と思いました。八幡さんの表現しようとしている世界は綺麗事であって、「犯罪被害」に巻き込まれた人間から言わせれば「ありえない」と思う人間もいることだと認識された方が良くと思います。

被害者側と加害者側、どんな段取りを経て同じ土俵に立つことはないと考えます。被害者家族は被害者家族。加害者家族は加害者家族。その両者の境界は絶対です。私は父を殺害した犯人の家族を許すことはありません。「何を？」と問われれば、「犯人の家族だったという」ことを。犯罪を犯す者に、抑止力になるような愛情を感じさせることが出来なかったのだとしたら、それは犯罪者家族の背負う罪だと私は考えます。それを棚に上げて、犯罪者の家族もある意味、被害者でしょ？ 可哀想でしょ？ と被害者がぶつて表に出ているのは如何なものかと常々思っています。そして八幡さまご自身も「中立」とおっしゃりながら、かならず加害者側に偏った目線で作品を創り出しているように感じました。厳しい言葉をぶつけることになってしまいました。厳しい言葉を許すことはあります。しかし、被害者のご家族とやりとりする中で、今回の作品がその全てに反してしまいうる感じ、もういっそ作るのをやめたほうがいいのではないかと考えました。

被害者家族からの言葉を受けて、私は大山さんにご連絡しました。「誰かを傷つけるのなら、やはり作るべきではないのかもしれない……この世界にはどうしても隣り合わせにできないものもあるのかもしれない」と。しかし、大山さんからの返信は次のようなものでした。「本来なら隣り合わせられないものを隣り合わせるから芸術

彼女が生きたかった、今日の日に。

毎日のニュースがコロナに占拠される中、加害者家族から依頼していた「詩」が届き、そこにタイトルの一文がありました。「今日」という日が誰にとつてのどんな日なのか、そうしたいくつものレイヤーに想像力を働かせながら生きていることが、他者との接続の準備になるような気がしています。そして実際に社会と繋がるうとするとき、それは芸術だったり医療だったり食だったり、一人一人が培った分野の中に必ず技術が隠れています。

しかし、どの分野にいても大事なこと、創造力なんじゃないかと思えます。創造力は生命力だと思えます。何らかの緊急事態のときに、社会の既存の枠組みの中に幽閉され、思考停止してしまわないように、常に鍛えていきたいもの。不要不急の用事」に「芸術鑑賞」は入ってこないのが今の社会かもしれません。こんなときこそ物事の見方を変えてくれる芸術の力・創造の力が、人間の魂を解放してくれると思います。同時に、芸術を生業にする者としては、社会からそのような必要とされる芸術を作り上げてゆかねばならないと強く思います。

最後に、被害者家族、加害者家族への取材を通して思うことは、他者を思うことも大切だが、自己を守ることも、自己の信条を貫くことも大切だということです。加害者家族と被害者家族の人がそれぞれに、たとえ分断したままでも構わないから、自分の幸せを追求できる社会であるように、社会の一員としての信条は「中立な眼差し」を持ち続けていたいと思います。



やばた、あき 映像インスタレーションを、「人間の表現」を生かすことのための思考装置」と捉え、取材をベースとした作品制作を行っている。また、「辺境」に人間の表現の根源的なものを感じ、その追求のための場としてHENKYO studio京都都を設立。この1、3月、最新作《彼女が生きたかった、今日の日に》を展示 (HENKYO studio, 2021年)。



芸術の力

大山さんは「自分は芸術のことはよくわからない」と言っていました。しかし先述の言葉は、私が芸術に対して思ったこととそっくりそのまま同じでした。本来なら隣り合わないような遠いものを隣り合わせにしたり、本来なら結びつかないようなものを結びつけることで、世界のあらゆる事象の見えない繋がりを知覚可能なものにしていくのが芸術だと思ってきました。「インド人の盲目の蠟燭職人×日本人の舞踏の舞踏家」「レビイ小体型認知症の女性×児童養護施設×おにぎり(の歴史)」など、掛け合わせ、隣り合わせからあぶり出されるものがありました。隣り合わせの中で、大山さんにいただいた前述の言葉は、私の芸術家としての使命感に改めて火をつけてくれました。私の考えに賛同し、協力してくれる人がある限り、最大限誰も傷つけず、しかし協力者と共に考えを社会と共有できる作品の形態を考えていくのが芸術家の使命だ。

最終的に、私は被害者家族の立場や言葉が作品の中に入れることをやめました。被害者家族か

「今日」という日が誰にとってのどんな日なのか、いくつものレイヤーに想像力を働かせながら生きていることが、他者との接続の準備になるような気がしています。



16



15

「同じ月を見た日」

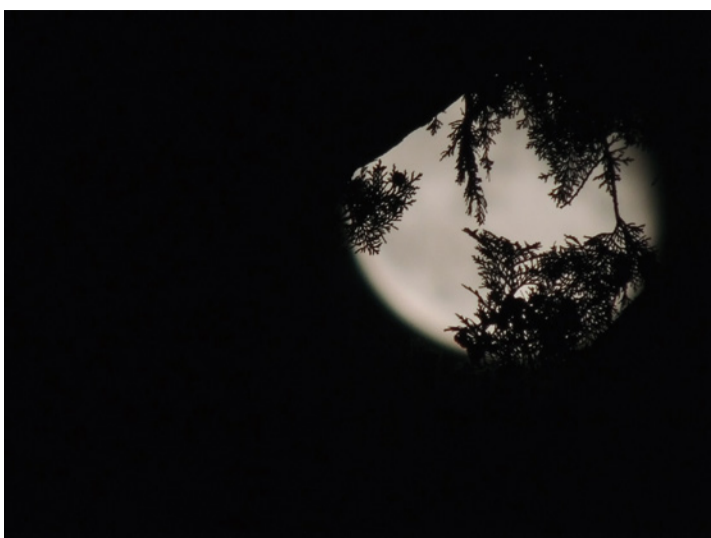
「ウイルスの影響で、世界に孤立が広がる今、月の観測をきっかけに多くの人が遠隔で柔らかに繋がり、自らの孤独と他者の孤立にまなざしを向ける」アートプロジェクト「同じ月を見た日」は、孤立しているかもしれない「あの人」や誰かの存在に目を向け、それぞれのまなざしを想像させる。様々な表情をみせる月の写真群は、コロナ禍の真つたに孤立感を感じる人々たちによって撮影された。

このプロジェクトの企画者であり、自身も深刻な「ひきこもり」を経験したことがある現代美術家の渡辺篤は、2020年4月、「家から月を見てみませんか？ 私たちは離れていても同じ月を見ることができます。」というメッセージをウェブサイトやSNSから発信した。参加の形態は、手持ちのカメラなどで撮影した写真を送る形のほか、交流会の出席と貸し出した単眼鏡で撮影する「メンバー」としての参加もある。

参加者を募集した結果、外出自粛や生活様式の変化によって孤立感を感じる人のみならず、心や認知機能の問題を理由に生きづらさを感じている人、自身や家族に身体の障害をもち困難を感じている人、シングルマザー、パワハラやセクハラ被害経験を持つ人、ジェンダーに関する悩みがある人など、様々な人が集った。渡辺のもとにそれぞれの手によって撮影された約1000枚の写真が届き、メンバーからの写真は現在も送り続けられている。

コロナ禍の2020年、「社会全体が孤立の当事者」となってしまうことで、孤立の課題はもはや他人事ではなくなったという。古来より、ここに居ない人を想う媒介として見つめられていた月。時空を超えて、今夜もここに居ない誰かのことを想う。

(編集部)



アイムヒア プロジェクト「同じ月を見た日」

遠隔参加による国内外の約70名(2021年2月現在)
 主催=アイムヒア プロジェクト(代表・渡辺 篤)
<http://www.moon-alone.online/onaji-tsuki>

あたまごころからだ

日比野克彦

「TURN」監修者/アーティスト

八木重吉の「心よ」という詩と出会ったのは高校2年生の時に、美術予備校の夏期講習会で岐阜から東京に1カ月ほど上京していた時でした。

ごころよ

では いつておいで

しかし

また もどつておいでね

やつぱり

ここが いいのだに

ごころよ

では 行つておいで

そのとき……。ごころが自分の体を出入りするという事実が、よく理解できる心境であったのだろう。なにか浮ついている、自分なのか、自分じゃないのか、あたまごころとからだだがバラバラになっている、高校二年生の夏。

一つになっていない感じ。浮ついている、落ちつかない、不安定、そんな時に、この詩は、その理由を教えてください。ごころが留守をしているからなんです。しかし、それを受け入れて「では いつておいで」と送り出している……。そして、必ずごころは戻ってくるという自信。

それはなぜかという、もともといた場所が居心地がよいに決まっているから……。そんな余裕でここを見送る。

2021年2月16日

「心よ」八木重吉全集1(ちくま文庫、1988年)より転載。
 初出「秋の暁」(富士印刷、1925年)

ひびの・かつひこ 東京藝術大学美術学部長、美術学部先端芸術表現科教授。アートを社会の中で機能させる手法を試み、地域や多業種の人々との共同プロジェクトを展開。2015年より「TURN」の監修を務める。

P.6-7に作品掲載

編集後記

夜空や青空を見上げた「私」や「あなた」は、どのような身体なのだろうか。コロナ禍において誰もが当事者になった今、何かの被害者かもしれないし、加害者かもしれない。もしくは両方だろうか。自覚もなく、誰かに指摘されることもなく、孤独のなかで抱え込んだ複雑な気持ちと、自分のあり方に戸惑いを感じていたかもしれない。

先日、あるニュースが目にとまる。2020年の1年間に、虐待の疑いがあると、警察が児童相談所に通告した18歳未満の子供は、前年比8738人増となり、2004年に統計を取り始めて以来、初めて10万人を越え、過去5年間で約2倍になったと警察庁が発表した。

増えた理由として、子供の安全確認、心理的虐待を含めた積極的な通告の徹底を挙げる一方、専門家は、外出自粛などが求められるコロナ禍で「家族の社会的孤立」「貧困」「親の精神的な不安定さ」の深刻化を指摘。顕著な影響は表面化していないとしても、「自らSOSを出せずに虐待が顕在化している」可能性があるという。

月を見上げながら、何かを念じていたとしたら、それぞれの思いや価値判断は異なっても、今を思う心があることにおいては同じである。そのニュートラルな身体が、異なるものが共にいるきっかけになるかもしれない。月に表情があるとしたら、私たちがどのような存在として見つめているのだろうか。

(畑まりあ)

『TURN JOURNAL』のバックナンバーは、
 こちらからご覧いただけます



TURN JOURNAL
SPRING 2020
—ISSUE 03



TURN JOURNAL
SUMMER 2019
—ISSUE 02



TURN JOURNAL
2018



TURN JOURNAL
WINTER 2020
—ISSUE 06



TURN JOURNAL
AUTUMN 2020
—ISSUE 05



TURN JOURNAL
SUMMER 2020
—ISSUE 04

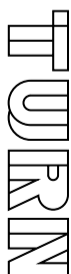
主催=東京都/公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京/特定非営利活動法人 Arts Embrace/国立大学法人 東京芸術大学
 監修=日比野克彦
 「アーティスト」東京芸術大学美術学部長・先端芸術表現科教授
 プロジェクトディレクター=森 司
 「アーツカウンシル東京 事業推進室 事業調整課長」

TURN JOURNAL SPRING 2021 —ISSUE 07
 2021年3月19日発行

監修=森 司「アーツカウンシル東京」
 編集=永峰美佳/杉原環樹/畑まりあ「アーツカウンシル東京」
 田村悠貴、山口麻里菜「特定非営利活動法人 Arts Embrace」
 デザイン=星野哲也
 印刷=三永印刷株式会社
 発行=公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京
 〒102-0073 東京都千代田区九段北4-1-28
 九段ファーストブレイス8階
 Tel=03-6256-8435 / Fax=03-6256-8829
 Email=info@turn-project.com

©2021 Arts Council Tokyo, Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture
 All rights reserved

TURN公式ウェブサイト=turn-project.com



文化でつながる。未来につながる。
 THE FUTURE IS ART
Tokyo Tokyo
 FESTIVAL

「Tokyo Tokyo FESTIVAL」とは
 オリンピック・パラリンピックが開催される東京を
 文化の面から盛り上げるため、多彩な文化プログラムを
 展開し、芸術文化都市東京の魅力伝える取組です。
 「TURN」は、その一環として展開しています。

